

コウノトリ湿地ネットニュースレター



9号 2010年5月1日発行
コウノトリ湿地ネット
豊岡市城崎町今津1362
電話 0796-20-8560



4月27日袴狭で探餌する363と428

4月末でのコウノトリたちの動向

2ヶ月がたち、今年のコウノトリの動向がはっきりしてきました。今年は7組のペアが産卵し、現在1組がまだ抱卵中、後の6組は孵化しました。現在までに、いろいろなことが起こり、残念ながら、2羽のヒナが孵化した百合地ペアは、最初に1羽、そして、4月30日に残る1羽も死亡しているのが確認されました。4年連続のヒナの巣立ちを期待していましたが、とても残念な結果になりました。

今年新たに産卵孵化させたのは、郷公園内の「J0405と野生個体(エヒメ)」、市内日撫地区の電柱上で営巣した「J0002とJ0408」の2組です。野生個体の遺伝子が、豊岡のコウノトリに新たに組み込まれたことは多様性を図る上で嬉しいことです。

福井県の武生からは、滞在中のJ0016に関する嬉しいニュースが入ってきています。1ヶ月あまり滞在を続けるJ0016の為に、餌場を作り、守っていかうとする市民の動きが出ているとか。豊岡から出て行ったコウノトリたちが各地で定着、交流し、地元の市民に愛される、私たちが目標としていることが、そのまま実現し始めているような気がします。



電柱上で抱卵する日撫ペア



コウノトリ目撃情報網の広がり願って

(湿地ネット会員 森 薫)

今年の繁殖・・・おや？おやっ！

2007年から続けられているコウノトリ目撃情報は、「放鳥されたコウノトリが餌を食べているのだろうか・・・」「元気に飛べるのだろうか・・・」の市民の声からスタートしました。

携帯電話のメールを使い、目撃した場所、時間、コウノトリの様子(採餌・旋回・降りているなど)を情報網のメンバーがほぼリアルタイムで発信し、それぞれのメンバーのもとへ届きます。その日の情報をまとめて、データとして使えるように当会の宮村さんが集計され、一日ごとに写真も添付されて、メンバーのパソコンに届きます。携帯メールでコウノトリの様子が入ってくると、元気に過ごしているなど安心し、その場の風景が浮かんできます。夜、自宅のパソコンに送られてくる観察記録からは、観察者の愛情や願いが感じられ、あたたかな気持ちに浸ります。

ところが、今年の繁殖期は例年と少し異なり、心配や疑問のメールが多く寄せられました。そこで、意見や疑問点を整理するために4月4日(日曜日)、目撃情報のメンバーで意見交換会を開きました。

意見の概要は、次のとおりです。

- ① 昨年、野生のメス(エヒメ)が J0405 とペアになり、コウノトリの郷公園で営巣・産卵したが、10個全てが放棄されカラスに取られた。遺伝子の多様性を確保する上でこの卵は重要である。今年もその兆候があるなら、擬卵に換えるなどの措置が必要ではないか。
- ② 赤石地区の人工巣塔で営巣している J0384 と J0389 のペアは、昨年、卵の全てが孵化しなかった。採卵し、無性卵なら他のペアの卵と交換してもいいのではないか。
- ③ 野上地区のペアは電柱に巣材を運んでは撤去され続け、日撫地区のペアはパチンコ店近くの電柱で巣作りしている。繁殖期になってからの対応では、コウノトリに大きな負担をかけさせるだけでなく、民間企業にも市民にも様々な負担をかけることになる。
- ④ 電柱に営巣することについて、その是非を方針として決めるべきだ。
- ⑤ 電柱に営巣しては人間に撤去されることが繰り返されるうちに、コウノトリはそこが不適だと認識し、他の場所を探すのではないか。試練を経て強くならないと、人里で暮らせないのではないか。
- ⑥ コウノトリ野生復帰をまちづくり、環境づくりとして捉えるならば、電柱への営巣は早い段階で鳥自身に諦めさせ、餌場づくりが進んでいる地域へ誘導してはどうか。
- ⑦ 安易な人工巣塔乱立が課題をあいまいにし、現場を混乱させているように思う。
- ⑧ 各ペアの活動エリア(テリトリー)の計画的配置(選定)とそこへの誘導技術の獲得が重要な課題である。
- ⑨ コウノトリの野生復帰の事業は、鳥が始めたことではなく人間が始めたことなのだから、はじめから終わりまで人間が責任をとる必要があると思う
- ⑩ 現在の状況は、なんとなく成功しているような、それで終わってしまうような・・・。私たちの望む「野生復帰」はこれでいいのだろうか。
- ⑪ 湿地ネットは、コツコツと餌場になる湿地づくりを続けていこう。



ミニ討論会

この意見交換会の後、野生ペアと赤石地区ペアの巣からヒナが孵化し、現在、順調に育っています。この2つについては、とりあえず問題クリアとなりました。やれやれ。

私たちは、生態系の頂点に立つコウノトリが暮らせるならば、その何万倍の生きものが暮らせ、人間の暮らしも心も豊かになると信じて、これからもコウノトリの餌場造りに励んでいきます。



戸島巣塔 親鳥と2羽の雛

そして、目撃情報からのデータの積み重ねから指針を得たいと、目撃情報網の広がりを願っています。2007年度、2008年度の目撃情報はデータから豊岡市の地図に落とすことが出来ました。(データ集を作成しました。管理棟に置いてあります。ご希望の方はお申し出ください。)



目撃情報 (全ての個体)

2008年度の地図を作成しながら、早朝からの観察や、冬の寒さ、真夏の車中の暑さを想い、通勤や外出の折に送られてくるメールに、気持ちのつながりを感じています。パソコンの苦手な私は、夢の中に豊岡の地図が出てきてうなされましたが・・・三橋先生の指導力と愛情いっぱいの情報に助けられました。

これからの目撃情報の送り方や、集計の課題を見つけ、市民の見守り隊から観察記録の積み重ねによる考察が出来る日がくるのではないのでしょうか。私たちがほんの少しの手間と、心の片隅でコウノトリを想い続けることにより、豊岡の自然再生の評価がコウノトリの力を借りて、おのずと現れてくると思っています。



私の村にコウノトリがやってきた

(豊岡市田結西光寺 寺族 日野西 直子)

2008年4月25日のお昼過ぎ、居間でくつろいでいた時でした。近所に住む山本のおばちゃん came 来られ、お寺の先にある田んぼの鳥を見てほしいとのこと。「コウノトリかもしれない。自分は市内中筋の生まれで、コウノトリのことはよく知っているし、一週間前にも見ているので間違いのないと思う」の言葉に、半信半疑で下の県道に降りてみました。

鳥が一羽いました。高鳴る胸をグッと押し留め、「やはり大きい。白い」と何度も何度も自分に言い聞かせました。早速、コウノトリの郷公園宛初めてのメールを送りました。そして、何事もなく数日が過ぎて、4月30



日野西ご夫妻

日の昼過ぎ再び確認。今度は背中に黒い物(発信機!)を確認。そのことを含めて2回目のメールを念のためしました。すると、その夕方、佐竹副代表様が

荒川秀夫氏とともに確認に見えました。メールはちゃんと届いていました。その時、タイミングよくコウノトリが舞い降り、荒川氏のカメラにきちんと収まったのでした。

次の朝より、私の「コウ君の追っかけ」が始まりました。「来てる?」「来てる!」「いない」が私たち夫婦の朝の挨拶となり、「来てます?」「見ませんか?」が野良仕事で谷に入る人への挨拶となりました。そして日々の飛来時間と場所を1冊のノートに綴ってきました。今も続いています。お陰様で観察記録として残すことが出来、うれしく思っています。



日野西さんの観察日誌

うれしいことと言えば、いろんな方のご縁をいただいたことでしょう。中でも東京大学の鷺谷先生とのお出会いは素晴らしく大変ありがたいことでした。また先生には、田結地区のことを大層気に入られ、何度も足を運んでいただき、ついには村の「ワカメ祭り」にサプライズ参加までなされたのには、ただただ恐縮の限りでございました。

それほどまでの先生の思いを身に沁みて感じ入る出来事が、2009年9月30日～10月2日に田結地区でありました。鷺谷先生をはじめとする教授陣、国連大学特別研究員、東京大学大学院生からなる総勢3名ばかりの方が来られて、田結の自然、特に生物の豊かさとそこに住む私たちの昔からの営みについて調査研究し、成果を発表するワークショップが開かれたのでした。単なる研究会ではなかったと思います。地区の人たちとの懇親の場が持たれ、そこではお年寄りを学生が囲む形でいくつもの話し合いの輪

が広がっていましたし、研究発表の場では市内の高校生も多数招かれ、外国人研究者が英語で発表するのを直に聞くというとてもアカデミックな雰囲気にも包まれたものでした。

こういった鷺谷先生の一連の活動とともに、兵庫県立大学の三橋弘宗先生の働きかけ、例えば2008年9月22日に田結の集会所で講演されコウノトリのためには水の管理が何よりも大切である事とその具体的で簡便な方法を説かれたことなどで、徐々に地区住民、特に地区役員の姿勢が変わっていきました。そして佐竹副会長様はじめ湿地ネットの方たちと連携してコウノトリの餌場作りに、竹林を切り払い、水路を掘り畦作りに汗を流し、今後の抱負を語り合うようになりました。

地区住民以上に地区外の人々の関心の高さに触れることも再々となってきました。里山整備事業「おいでコウノトリ、くるな土砂災害」プロジェクト、コウノトリ観察施設「鶴見庵」建設など、地区では到底対応できない事業が目白押しとなっているのも、そういった事情からなののでしょうか。なにはともあれ、戸島湿地のコウノトリは、田結の良さ・不思議さを、共に生かされていることを私たちに再認識させてくれました。人間は決して侮っては騎ってはいけない、自然すべてに対して畏敬の念を持たなければいけない、そうであれば私たちに未来はないでしょう。そのような思いに駆られている私は、この春から田結で起居この村での人間と自然との不思議な関わり方をテーマに研究に取り組んでおられるケンブリッジ大学大学院生・石原広恵様が立派な論文を書き上げられることに、ほのかな希望を繋いでいます。

コウノトリが田結に希望と夢と幸福をもたらしてくれたように。



2008年4月田結に降立つコウノトリ

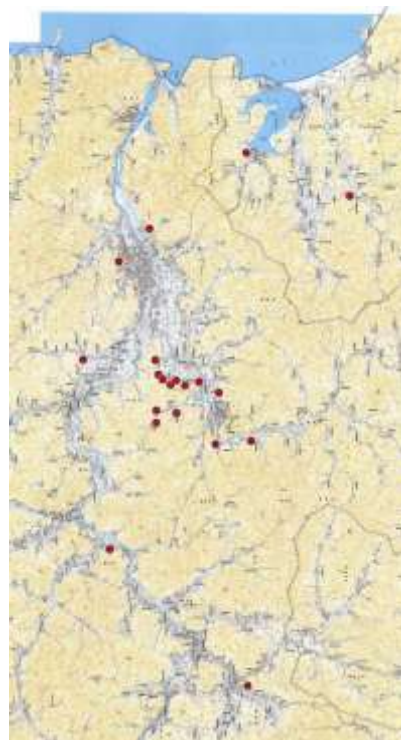


かつて豊岡盆地で生息していたコウノリたちは、渡り鳥だったのか、留鳥だったのかを過去の文献から探る Vol.2です。

繁殖のために飛来するコウノリが年々増加し、最盛期へ

前号で引用した岩佐修理氏の研究文「カフノリ(II)」(1936 兵庫県博物学会誌12号)には1912(大正2)年から1935(昭和10)年までの営巣地を記載した年表が載せられている。それによれば、1914(大正3)年までは1巣だったが、翌年から2巣となり、以後は1925(大正14)年まで1~3巣で推移する。ところが、1926(大正15)年に9巣と一気に増え、以後、11、12、15、17巣と増え続け、1934(昭和9)年には今日までで最も多い20巣となっている。場所も拡大して南端は朝来市和田山町牧田地区、北端は京丹後市久美浜町神谷地区であり、南北約35km、東西約20kmのエリアである。(右地図参照)そしてこの年を境にして、以降はまた一気に減少していく(ちなみに1935年は18巣)。

なぜ、昭和初期に一気に拡大し、その直後から減少したのか。拡大は、渡って来る個体が増えたからか、それとも、孵化したヒナが成長し、順次繁殖しだしたからか。まず、増えていく様子を観察記録から見てみよう。



(1)この時期、全国各地でもコウノリは増えていたか？

当時の全国の鳥の様子を知るには、農林省畜産局(後に山林局)による「鳥獣報告集」が最適だろう。(※1)これは、同局が全国の鳥獣研究者や研究機関に調査を委託し、その報告を記録したもので、1925(大正14)年7月から1938(昭和13)年12月までの全国の鳥獣の生息状況が記載されている。ちょうど、コウノリ最盛期であるのがうれしい。膨大な資料の中から、豊岡市立図書館司書の中村史君が「コウノリ」が記述されている個所をていねいに抜粋してくれた。

それによれば、兵庫県以外では青森県(9/9)、京都府、熊本県(4/29)から各1件あるだけで、いずれも通過途中の滞在である。繁殖、あるいは越冬の報告はない。ちなみに、当時植民地であった朝鮮半島黄海道から2巣の報告(1930年3月)、対岸の中国渤海沿い老鉄山から約50羽の南下報告(1933年11月)がある。兵庫県内の報告は16件。内訳は但馬地方12件、淡路島3件(4/16,10/未,秋)、姫路1件(4/25)で、但馬以外は通過途中の滞在である。どうやら、国内での個体数増加と繁殖は但馬地方だけのようだ。

(2)但馬地方での渡来、渡去の様子

上記農林省への報告者は、旧竹野村の谷垣義三氏だ。渡りか留鳥かを探るため、同氏の報告と前記・岩佐修理氏の論文を併せて見てみよう。

谷垣氏は留鳥説だ。「翌年巣を造らんとする場合は、前年冬期より常にその付近を徘徊し、巣を造る松を選定し常に松樹上にとまり居れり」(1930)と観察結果を述べられる。そして営巣地の増加については、明治37年に1巣だったものが大正初年頃から増加していることを見て、コウノリは孵化後20年近く経たなければ交尾しないのではないか、と推測されている。

これに対して、岩佐氏は一部留鳥、一部渡り(あるいは移動)説だ。その理由として、①冬期でも「かなり」姿を見る。②しかし、出石の谷では、毎年、雪が降ると姿が見えない。③11月末に約50羽が南下していったのを目撃した人がいる、を挙げられる。さらに踏み込んだ例として、1934(昭和9)年の和田山では、「12月初旬までは親子連れだつて採餌しているのを見たが、1月になると親(多分)だけ残り、他は何れかへ行って遂に姿を見せなかった」と述べられている。そして次のように結論される。「成熟したもの、即ち親鳥は土着してこの土地を離れない(繁殖期に営巣していない個体は見出されない)が、その年に巣立ったものは何処かへ渡って行く。その時期は11月末から翌年1月頃である」と。

両者の記述からは、岩佐氏に軍配が上がるように思える。谷垣氏が全員留鳥とされる根拠のコウノリは、今日では3~4歳とみられており、豊岡での放鳥個体の例では、2006年生まれのオスが2008年にペアとなり交尾・繁殖させている。谷垣氏が観察された、冬期に巣づくりしている個体は留まった親鳥であると考えれば、性成熟年齢の間違いを除けば両者の観察記述は一致している。(※2)(※3)

では、なぜ土着している親鳥の数が増えたのだろうか。岩佐氏は、次のように推測される。渡って行った幼鳥が、何年かの後に成鳥となって再び渡来してくるのではなからうか、と。なるほど、と思う点もあるが、しかし、谷垣氏の論と同じく、これでは増えていった個体は全て明治期の最初の1ペアの子孫ばかりとなってしまふ。本当にそうなのか

(3)剥製から検出された遺伝子の解析結果

私が市役所勤務当時、兵庫医科大学遺伝学教室・山本義弘教育教授と神戸市立王子動物園の村田浩一獣医師(現日本大学教授)に依頼し、豊岡市内の公的施設に保存されているコウノリの剥製17体の全てからミトコンドリアDNAを検出・解析してもらった(全体の解析結果は次号で)。剥製の多くは、添えられた説明書で「但馬コウノリ保存会」によって剥製処理されたことが分かるので、同会が発足した1958年以降に死亡した個体だ。だが、出石町の小、高等学校に保管されている3体は明記がなく、剥製の状態や過去の生息状況等から同年以前に死亡したものと思われる(うち、1体にはラベルが添付されていた※4)。

この3体は、解析の結果、2つのハプロタイプに分けられることが判明した(※5)。つまり、1羽は少なくとも他の2羽とは母系が一緒ではなく、血縁関係がないことを示している。増えていった個体は、その全てが明治期の1ペアの子孫ではないことが、まずは遺伝子から明らかとなった。

ならば、当時のコウノリたちは「南下」してどこに行き、誰がどのように但馬を知ってやって来たのだろうか？なぜ、豊岡盆地に集結せず和田山から久美浜の広範囲に分散して営巣したのだろうか？また、昭和9年以降はなぜ行き来する個体数が減ってしまったのだろうか？

読者の皆さん、情報と推測をお寄せください。みんなで考えましょう。

- ※1 「鳥獣報告集復刻版1～3巻」皓星社 1998年刊
- ※2 1923年に兵庫県が刊行した「兵庫県史跡名勝天然記念物調査報告書」も、「冬期は多少その数を減ず」るのは、「恐らく一部の鳥が南方に渡行するが為ならんと思考せらる」と記述している。
- ※3 やむを得ないことだが、当時の観察には「多分」や「多少」の文字が目につく。岩佐氏は、論文の最後に「観察を繰り返すこと、その年度の雛に標識を附すること」を訴えられている。徹底した観察が必要なのは、今も同じである。
- ※4 小坂小学校に保管されている剥製1体のケースには「s10」記された小さなラベルが貼ってあった。片間地区の吉谷氏はこの個体の死亡時の状況を目撃された方だ。この個体は「大雪であった昭和10年の冬に自宅から見える田んぼでじっと立っていたが、そのまま倒れた」とのこと。
- ※5 山本義弘、村田浩一ほか(2004)「Retrospective estimation of genetic diversity of an extinct Oriental white stork (*Ciconia boyciana*) population in Japan using mounted specimens and implications for reintroduction programs」

コウノトリ湿地ネット入会のご案内

湿地ネットでは、「正会員」「賛助会員」となり、活動を支えてくださる方を募っています。

※正会員 **入会金2000円、年会費2000円**（積極的に、会の活動を支えてくださる方）

※賛助会員 **年会費2000円**（年6回ニュースレターをお送りします。その他自由に活動にご参加ください）

会の趣旨にご賛同いただける方は、ぜひご入会をお願いいたします。

振込先

郵便振替 **加入者名 NPOコウノトリ湿地ネット**
口座番号 00900-0-194128

※ 継続会員の方で今年度の振込みがまだの方は、会費の納入をお願いします。





コウノトリのお菓子訪問

こうの卵

カタシマ株式会社 豊岡店

但馬を代表するみやげ物を！



外観もとてもおしゃれなお店にお邪魔しました。店内は美味しそうなケーキとそれを求める、また、喫茶コーナーでの憩いのひと時を楽しんでいるお客様でいっぱいでした。

お忙しい中、店長の片島さんにお話を伺いました。

「こうの卵」コウノトリの卵をイメージしたお菓子は、2005年のコウノトリ放鳥を契機に製作に着手されたとのこと。2007年から売り出されました。周りは柔らかいスポンジ、中はとろりとしたカスタードクリームで作られています。グレードの高いものを、そして但馬を代表するみやげ物をと、追求して作られたそうです。お店のお菓子の中でも、進物物としてはベスト1を誇っているとのこと。私も頂いたのですが、柔らかく、やさしい味わいで、コウノトリの卵をイメージすると、さらに美味しさが増すような気が・・・。

店長さんは豊岡に赴任して、まだ、間がないとのことでしたが、2005年の放鳥には、ご家族で来豊されたとのこと。あのときの感動を共有していたことを、とても嬉しく思いました。



ハマダヤ製菓

老舗中の老舗！

鴻の鳥饅頭



まず、お店に入ろうとすると、ウィンドウには、2羽のコウノトリの模型が仲良く並んでいます。お店に入ると、正面の壁には大小さまざまな大きさのコウノトリの写真がびっしり。ショーケースには、「鴻の鳥饅頭・鴻の鳥巣ごもり饅頭・鴻の鳥カステーラ・鴻の鳥もなか・鴻の鳥らくがん・鴻の鳥せんべい」と、コウノトリ尽くしの菓子が並んでいます。

鴻の鳥の菓子を作り始められたのは、先代の当主で、もう、50年以上も前のことだそうです。地元の題材でお菓子を作りたいと始められたそうで、豊岡での草分けの存在と言えそうです。

取材に応じてくださった当主は、ネット販売、宅配便での送り等やっておられず、来店された方に販売されるのみとのこと。しかし、豊岡の土産には「鴻の鳥饅頭」とかなり浸透しているようです。取材時にも会社で「この饅頭を買ってくるように」と言われたとかで、タクシーに乗って来店された方がありました。

私もいろいろ食べてみました。みんな、上品なやさしい味のお菓子です。私のお勧めは、今回始めて食べた「鴻の鳥らくがん」です。とてもかわいい、鴻の鳥の形をした白餡入りのらくがんです。食べるのがちょっとかわいそうな気もしたのですが、やっぱり美味しく頂いてしまいました。



とよおか作業所 愛・とーぶ 郷・とーぶ
地域と共に生きる!



コウノトリ ヨーちゃんのミニカステラ コウノトリ 見つけてきました

とよおか作業所は、知的障害がある人のための授産、訓練施設です。ここで、コウノトリのミニカステラを作っておられます。形は3種類あり袋に詰め合わせています。形を確かめるのも楽しみ、程よい甘みの、一口大のカステラです。

この2月からは、「コウノトリ育む農法」の米粉で作ったカステラも売り出されました。

また、最近小さい袋入りの商品も注文に応じて作っているとのこと。記念品や、催し物での配り物等、いろいろな機会に使ってほしいとのことでした。

今年の2月、神戸で開かれた「スイーツ甲子園」で最高賞の「グランプリ」を受賞。所長さんは、ミニカステラの味だけではなく、地域（コウノトリ）と共に生きるという、作業所の姿勢が評価されたのだと思う、作業所みんなの励みとなり、また、外部へアピールもできたと言われました。

とよおか作業所では、いろいろ工夫をこらし、評価されたその場所に止まることなく、新しい工夫を続けておられました。

ラ・シゴニーユ
豊岡ならコウノトリ!

コウノトリ食パン



「ラ・シゴニーユ」とは、フランス語でコウノトリの意味だそうです。店主は、東京から豊岡へ戻って店を開くとき、豊岡なら「コウノトリ」しかない、と思いこの店名にされたとのこと。

コウノトリ食パンを作るきっかけは、知り合いからコウノトリ育む農法で作った米の欠け米などを、使い道がないかと相談されたことで、米粉にしてパンに焼き上げることを考えられました。使っているのは発芽玄米と、小麦粉を合わせたもの。トーストすると、外はパリッと、中はもちもちとした歯ごたえです。その他にも「シゴニーユロール」という、ケーキ風の菓子パンも作られています。

店内は作りたてのパンが次々と運び込まれ、引きもきらず、お客さんが訪れていました。



文字通り、美味しい取材でした。今回ご紹介したのは、豊岡のほんの一部の商品です。取材した商品の多くが、さまざまな賞を受賞していることを知って、コウノトリを冠した商品を作ることに熱い思いを注いでおられることを深く感じました。お忙しい中、快く取材に応じてくださいました皆様、ありがとうございました。

(湿地ネット会員 宮村さち子)


 ハチゴロウの戸島湿地便り

3月～4月編

3月28日に1羽、さらに4月5日に2羽のヒナの孵化を確認しました。

この間に当会のメンバーが4回(3月28日、29日、4月2日、5日)巣塔近くの山に登られ、春の雪や嵐のなか斜面から親鳥が立ち上がるのをひたすら待ち続け、やっと2時間半で写真が撮れたとのことです。

産卵や孵化の確認のための山登りは、労力と時間がかかるぶん、ワクワクと高揚感もあるようです。

管理棟で連絡を待つ私にも、同じ時間が流れます。

そんなことから考えていると根拠はありませんが・・・巣塔の中にコウノリが嫌う(?)カメラは必要ないのではと思えてきます。「人間の都合で知りたいことは、不便でも人力で」ということは生きものの世界の掟ではないでしょうか。

研究のためには必要でも、(生きものにとって)大切な巣の中にまでカメラを付けて(人間が)知ることより、想像の世界を持ち続けている方がお互いに幸せなこともあると思います。子供たちには、コウノリ(生きもの)のことを考えるなかで、想像の世界も大切にしてほしいと願っています。

オープンして2回目の春休み、管理棟は子供達で賑わいました。

3月27日の午後、『ENEOS(エネオス)わくわく生きもの学校』のみなさんがお越し下さいました。わくわく生きもの学校は、新日本石油株式会社(本社:東京都港区)が、コウノリ野生復帰の支援活動の一環として開催されました。

当日は、子供たち体験を一番の目標に、下記の内容で進行了ました。

- ①豊岡市長さんによる『コウノリ野生復帰の取り組み』のお話を聞く。
- ②講師の兵庫県立大学、三橋弘宗先生から、戸島湿地の構造と外来種のお話を聞く。
- ③ブルーギルの罠を仕掛ける。
- ④昨日から仕掛けた定置網を引き上げ、魚を出して再度定置網を仕掛ける。
- ⑤三橋先生の指導のもと捕れた魚を分類計測する。元気な魚は汽水域へ返す。
- ⑥水路で、生きもの調査をしながら外来種、ウシガエルのオタマジャクシを駆除する。
- ⑦淡水域にドジョウを放流する。
- ⑧三橋先生によるワークショップ『外来種が増えると、どれくらいこまるの?』を行う。

このワークショップの広がりを期待して、下記に再録します。

くじ引きゲームを使って、メダカが生き残ることの難しさをみんなで体験することがねらいです。



メダカが、ため池にずっと生息していくためには、最低でもオスとメスの1匹ずつが生き残らないといけません。野外で生まれた稚魚のうち、10%程度しか生き残れないそうです。

☆ 100枚のカードのうち、90枚のカードに死亡する原因(餓死、病死など)を書き

↓

☆ 10枚のカードに、5枚は生き残ったオス。残りの5枚には生き残ったメスと書きます。

カードは、『生態系のツボ』に入れていきます。

子供達は、メダカの気持ちになって、どうして死んでしまったのかを書いていきます。

「干からびてしまった」「カエルに食べられた」「寿命」「喧嘩」などなど・・・

コウノリ湿地ネットは、「生き残ったオス」5枚と「生き残ったメス」5枚のカードを書いて入れました

☆ 100枚のカードが入ったところで、全員が1枚ずつ引いていきます。

なかなか、生き残ったカードは出てきません。

↓

☆ もう一度、今度は2枚ずつ引いてみました。

↓

☆ やっと、1枚。生き残ったオスのカードを引きました。

この中に外来種のカードを100枚入れるとどうなるか・・・

↓

自然界では、オスもメスも生き残るのは難しいことを分かせて頂き、この状態が、今日本の池や湖でおこっていることだと教わりました。

↓

そして、この中に「草の中で生き残れたよ」というカードを入れてみるとまた違ってきます。

三橋先生のお話を聞き、「草の中で生き残れたよ」というカードをたくさん作ることが、自然再生につながり私たちの課題なのだと思います。

外来種の影響や、いったん数が少なくなると一気に絶滅する仕組みを体験し、めだかの気持ちになって・・・厳しい現実を、めだかになって想像することで、分かせてもらった貴重なワークショップでした。

子供たちの感想は、「自然の厳しさがよく分かり、先生の話をもっと聞きたかった」「ゲームは、なかなか生き残ることができなくてドキドキした」など、絶滅の恐ろしさが体験できたという声が多く寄せられました。

保護者からは、「学校では、こういう授業はないと思います。未来に向け、次世代のために多くの方たちが頑張っている姿を、子供たちが体感出来ました。」「参加してよかったことは、子供が『湿地』という言葉とその必要性を知ったこと。沼や湿地を体験することはなかなか出来ないのでもいい勉強になりました」など現場での体験の必要性と、「自治体の活動に企業が協賛していることは良い事だと思います。環境に対する取り組みを、企業も支えているのだということを学ぶ機会になりました」「スタッフとして支えて下さる共生課の方々の気持ちがあたたかく、感謝の気持ちでいっぱいです」などコウノリ野生復帰への協賛企業、研究者、行政、NPOの取り組みへの理解と、体験から学ぶことの意義を実感されたようでした。

これからも『ENEOS(エネオス)わくわく生きもの学校』が引き継がれますように。また、ハチゴロウの戸島湿地での体験が、子供たちを自然・生きものへの誘いのきっかけとなりますように。

(森 薫)



コウノトリ湿地ネット賛助会員名簿

<新規入会>

法人会員

豊岡市

(有) 城崎環境

ありがとうございました。

(2010年2月27日～4月30日)



思うこと

山の木々が新緑で美しくなってきました。下ばかり見てきた自分に上を見ることを教えてくれたコウノトリ、コウノトリを追って空や山を見る機会が多くなり四季を感じる色々な場面をくれました。

このコウノトリの為に自分に何ができるのか、また一度考え行動していきたい。戸島湿地で3年連続の巣立ちを楽しみに頑張ろうと思います。

(コウノトリ湿地ネット代表 横田登代子)



朝もやの中で

「編集後記」

今年の繁殖はいろんなことが起こっている。6個産卵中唯一生育のヒナが死亡し全滅の巣(これまでもヒナ生育率が極めて悪し)、電柱での営巣を追われ続けてやっと人工巣塔で産卵した巣、パチンコ店裏の電柱で孵化した巣、孵化した1羽が消えてしまった巣、この巣のペアに襲われて卵が壊れた巣、メス同士で産卵したものも現れた。こうも一度に出てくると「野生ではこんなこともあるさ」では済まされない。科学的な解明が求められる。(佐竹)

一世帯の年間支出(総務省:家計調査)では、米代の2倍がお菓子代、それより高いのが携帯電話代です。私の愛読書(婦人之友)によると、茶碗1杯のご飯の値段は、1キロ400円のお米だと29円。

(生産者価格はその半分の15円。これでは農家に申し訳ない)

ご飯1杯と、イチゴ1粒、ポッキー2本と同じ値段とのこと・・・コウノトリ育む農法のお米だと44円。スナック菓子1袋の値段で、ご飯2杯も食べられることになる。

ほかほかご飯1杯44円に感謝して、買い物の仕方や食生活、暮らし方を見直していきたい。(森)

今年は、なかなか暖かくならなかつたが、やっと例年の気温に、と思うまもなく、暑い！今年は春を飛ばして夏へ行ってしまふのだろうか。自然界の不安定さは、生き物にも影響してくるのだろうか。(宮村)